

## 中谷孝雄「春」考

——川端康成との関係をめぐって——

渡邊 浩史

はじめに

一、小説「春」

二、「春」と川端康成

三、〈生きられている空間〉／〈期待の場<sup>トホス</sup>〉

四、ヘドツペルゲンガー・久慈

五、「どうにもならぬ真実の姿」

中谷孝雄「春」（「麒麟」一九三三・五）に関しては、これまで殆ど論じられた形跡がない。しかし、発表当時には川端康成から「不拔の境地に達した」小説としての評価を受け、さらには中谷自身も「作家としての処女作」として「この作品をあげたい」と主張していることから、この小説を分析することは、中谷作品の特質を知る上においても非常に意義深いことだと思われる。本稿では、川端康成の同時代評を参照しながら、小説「春」の構成や表現について考察する。

## はじめに

中谷孝雄「春」は、一九三三年五月に同人雑誌「麒麟」に発表され、その後、赤塚書房から三七年七月に刊行された初の創作集『春の絵巻』に収録される。さらには、四〇年一月に人文書院から刊行された同名の短篇集『春』に、そして六五年二月には、冬樹社から刊行された『愛にひらく』にも収録された小説である。三高出身である中谷の学生時代を素材にしたこの小説は、発表翌月の「新潮」（一九三三・六）の「文芸時評 新人の作品」のなかで、川端康成から次のような非常に高い評価を与えられた。

石坂洋次郎氏の「若い人」（三田文学）、中谷孝雄氏の「春」（麒麟）、堀壽子氏の「手紙」（櫻）、荒木巍氏の「その一つのもの」（改造）——その他、新人のすぐれた力作を読むことが出来たのは、今月の私のしあはせであつた。（中略）／＼しかし、この「春」などを読んでみても、中谷氏が黙々として不拔の境地に達したことは明らかにうかがへるのである。

（傍線論者、以下同様）

川端はこの論評のなかで、中谷のこれまでの「閱歴」にも触れて中谷作品のなかで「春」が「不拔の境地に達した」小説であると位置づける。川端による同時代評での評

価は、中谷にとって相当励みになるものであり、また、自信を深めることにもなった。実際、この同時代評を契機として中谷は期待の新人として文壇に迎え入れられることにもなったし、小説「春」はその後に刊行される三つの作品集に収録されることにもなったからだ。では、川端康成に「不拔の境地に達した」と言わしめた中谷孝雄の「春」とは一体どのような小説なのであろうか。本稿では、川端康成の同時代評を参照しながら、小説「春」の構成や表現についての考察を行う。

### 一、小説「春」

小説「春」は、二度目の落第をしてしまった「須山啓一」と「久慈」という二人の落第生の交遊を中心にした物語である。梗概は次の通りだ。

須山啓一は二度目の落第をしたことで遁走を計画する。理由は、一度目の落第の際に見せた父親の狂態の怖ろしさに耐えきれなかったからだ。だが、それは学校を休んだり、夜遊びに耽っていた啓一自身の怠惰な学生生活が招いた当然の結果とも言えた。そんな啓一が遁走を敢行した日、祇園の公園に夜桜見物に来ていた久慈と遭遇する。久慈も啓一と同様に二度目の落第をしてしまい、坊主頭になって父親に謝罪をしたところであつた。そんな二人はそのまま四

条のカフェーで酒を飲み、お互いの苦しい胸の内をさらけ出す。やがて、久慈が自身の童貞を捨てたいと言い、啓一がその願いを叶えるために女達のいる店に久慈を連れ出す。しかし翌日、久慈は女性を買って童貞を捨ててしまったことを後悔し、啓一がそのような店に連れていったからだと抗議する。もちろん、啓一にとっては的外れな意見であった。しかし、それからも何故か二人は、お互いを憎み合いながらも共に行動する。だが、ささいな出来事から殴り合いに発展した彼等の行動はそこで終焉を迎えた。一人になつてしまつた啓一は、以前に受け取つた父の手紙を読み、そのなかで繰り返される父の怒り、反省、そして啓一に対して希望を失つていない父の心情を知る。そこで啓一は、溢れ出してくる感動を抑えることができなくなるのであつた。

短篇の小説ながら、学生の感情の振幅や視野の変化の様相が明確に描き出された佳品として評価できるだろう。実際、前述の川端康成も、落第した啓一と久慈の行動から見えてくる彼等の心境の変化を分析して「不拔の境地に達した」小説が生成されたことを指摘している。さらに、同名の短篇集である『春』には、「春に就いて」という中谷自身が書いた次のような序文が添えられていた。

京都の高等学校にゐた頃、作者は甚だ怠惰な生徒で

あつた。その頃の生活を、それから約十年の後になつて回想した時、小説「春」が生れた。

この作品は、発表の当ても大變好評を受けたものであるが、作者にとつても愛着の深い作品である。所謂私小説といふものではなく、書いてある事実は大方虚構のことに属するが、それだけに却つて、作者にとつては事実を越えた純粹な思ひ出となつてゐる。

作者はこの作品を書く前にも、既に十数篇の習作を発表してゐるが、作家としての処女作を問はれるならば、この作品をあげたいと思つてゐる。(作者)

中谷は、「春」発表以前にも「既に十数篇の習作を発表してゐる」作家であつた。にも関わらず、この「春」を自身の「処女作」であると位置づけている。もちろん、そこには「発表の当ても大變好評を受けた」という川端の同時代評の役割が強いのは確かだが、それだけではないという事実が「所謂私小説といふものではなく、書いてある事実は大方虚構のことに属するが、それだけに却つて、作者にとつては事実を越えた純粹な思ひ出となつてゐる」と指摘するこの箇所からも読み取れる。

中谷は「怠惰な生徒であつた」頃の自分の過去を見つめ直そうとして、小説「春」を書き始めた。換言するならば、彼は自己の記憶をプレテキストとして、新たなテキストに

向かったのである。学生時代の様々な出来事は「約十年」も前の遠い時間の彼方に去ったものだ。中谷は心象風景として、学生時代の像を甦らせながらも、「私小説」とは違う。「大方虚構のことに属」した小説タダストを生成したのである。そして、それは「事実を越えた純粋な思ひ出」として中谷の眼前に再現し表象された。しかも「既に十数篇の習作を発表してゐる」ながらも、中谷はこの「春」を「作家としての処女作」として宣言するのである。この言説からは、自信に満ち溢れた中谷の表情を推し量ることができらるだろう。中谷は「春」を書き上げたことによって、小説家としての大きな変化を感じ取っていたのだ。

ここで重要なことは、「春」が中谷にとっての純粋な「処女作」ではなかったかどうかということではない。「春」を「作家としての処女作」として位置づけることによって、作家になることができた<sup>、</sup>と考える中谷の認識こそが重要なのである（傍点論者）。

では、その点に関して、次節からは川端康成の同時代評を視野に入れながら検討してみよう。

## 二、「春」と川端康成

前述のように、この「春」は川端康成の「文芸時評 新人の作品」という論評によって文壇に認められた小説であ

る。ここでは「不拔の境地に達した」この小説の特徴について、本文を引用しながら具体的に分析を試みる川端の姿があった。

例へば、主人公の高等学校の学生が二度目の落第をして、家を遁走して停車場へ行く途中、妹に出会ふところを、こんな風に書いてゐる。

「そして、暫くその道を歩いてゆくと、彼は向ふから歌をうたひながら帰ってくる妹に出逢つた。妹は手に半開の桜の枝を持つて、それを振りながら遠くから彼に挨拶した。彼が涙のあとを気づかれないようにその顔を平手で撫でまはしてゐるうちに、彼女はどんな彼の傍にかけよつて来て、彼がまだ何も尋ねもしないのに、彼女は軽便の駅へ遊びに行つてきたのだなどと言つて、それから彼に何処へ行くのかと行先を尋ねた。彼が散髪のために町へ行くのだと答へると、妹は片手を差出して、（お土産！）と言つて笑つた。何が欲しいのかと尋ねると、この十二歳の少女は、（お菓子）と言つてまた笑つた。そして、彼が（よしよし）とそれに約束を与へると、妹は彼女の好きな菓子の名前を二つ三つ並べて、それからさつさと彼の傍を通り過ぎて行つた。暫くして彼がその方を振り返つてみると、彼女は元気に桜の枝を振つて歩いてゐたが、やがてまた

歌をうたひだした。彼はその遠ざかつてゆく歌声を背にききながら、せつせと道を急いだ。」

これはこの「春」のうちで、最も甘い一部分である。私はわざと甘いところを選んで、写し取ったのである。なぜならこの作品に比べると、私達の書くものはあまりに甘いからである。しかし、妹が桜かざして行くやうな甘い一節にも、いはば堂に入った、不思議な美しさを感じられないであらうか。地味な修練の光がさしてはゐらないであらうか。

川端はこの論評のなかで、「春」のなかでも「最も甘い一部分」を選択し、その切り取った「一節」にも「堂に入った、不思議な美しさ」「地味な修練の光」を見出ししている。換言すれば、その他の箇所には「甘い」要素のない、ある種研ぎ澄まされた「修練の光」が満ちているということだろう。さらに、川端は「最も甘い一分部」を「写し取ることによって、如何に「私達の書くもの」が「甘い」「作品」だったのかについて訴えかけている。因みに、ここで言う「私達」とは、自分自身を含めた文壇の多くの作家達を指し示していると思われる。

だが、そうした文学史的事実よりも、ここでは中谷の「春」を読むことによって同時代の「私達の書くものはあまりに甘い」と感じた川端の認識に注目してみたい。大正

後期から太平洋戦争が開始される年までの二〇年間にわたって「文芸時評の筆を執」り、時代と作品の關係性を論じてきた川端は、中谷以外にも「数々の新しい才能を見出して」きた「当代第一の批評家」でもあった。そんな川端が中谷の「春」に見出した特質とは何だったのであろうか。その点に関しては、次に引用するこの論評の続きから判断したい。

それから京都へ着き、やはり落第坊主の友人と落ち合つて、酒を飲み、女を買ひ、その青年期の憂鬱は、下らん生活だと云へばそれまでだが、そこにどうにもならぬ真実の姿がとらへられてはゐる。簡単には名状しがたいものがある。中谷氏は梶井氏のやうに冴えた鋭さは持たぬが、またちがつたものをぞつと胸で支へてはゐる。

川端は、「落第」した学生同士が「酒を飲み、女を買」つたりする「青年期の憂鬱」に関しては「下らん生活」だとして大した関心を示さない。しかし、そんな「青年期の憂鬱」が表象された「下らん生活」とも言うべき落第生同士の行動のなかから、川端は「どうにもならぬ真実の姿」を掘り起こしている。

川端が中谷の「春」に見出した「どうにもならぬ真実の姿」について、この論評が発表された翌年に「文学界」に

川端が発表した評論から考えてみたい。

丹羽文雄氏の作品を原稿で読んだことがあつた。林房雄氏が戯れに「破廉恥極まるもの」と呼んだ作品であつた。小学校の女教員の乱倫な生活を書き、最も甚だしいのは、墮胎手術が約十枚に渡り、粘り強く細描してあつた。発表は許されさうもなかつた。読みながら私は頭痛を催すほどで、作者の神経はどうかしてゐるのではないかと疑つた。「象形文字」（改造）、「贅肉」（中央公論）等に於ける丹羽氏は、決して病的頹廢で片づけることの出来ないものがある。なにか強いものがある。

作風はそれぞれがふけれども、荒木魏、張赫宙、石坂洋次郎、外村繁、大谷藤子、中谷孝雄、新田潤、高見順、島木健作、その他の新人諸氏にも、なにかこの強さがある。これはもつと注目されていいはずであると思ふ。新人に新しきものなしとは、文壇一般の嘆声であるけれども、形式的外面の新しきよりも、この生活の奥底から鈍く持ち上つて来る強さの方が、面白いのではないかと思ふ。それに就て考へてくれる批評家の努力が望ましい。

この評論で川端は「新人に新しきものなし」という「文壇一般の嘆声」を念頭に置きながらも、丹羽文雄の作品を

端緒として、「形式的外面の新しき」を指す「文壇一般」の作家には見られない「生活の奥底から鈍く持ち上つて来る強さ」に注目する。そして、その「強さ」を中谷ら「新人諸氏」の文学的な共通の「面白」さとして捉え、今後、そのことについて「考え」る「批評家の努力が望ましい」と主張するのだ。恐らく、川端が中谷の「春」から掘り起こした「どうにもならぬ真実の姿」も、この評論で指摘された「生活の奥底から鈍く持ち上つて来る強さ」と軌を一にするものであろう。

以上のような川端の視点は、小説「春」の主人公が時折見せる激しい心情の揺れから分析されたことが大きいと思われる。そこで次節では、「春」の主人公が見せる心境の変化について検討してみたい。

### 三、へ生きられている空間／へ期待の場

小説「春」は、主人公・須山啓一の二度目の落第で幕を開ける。啓一は、二度目の落第の事実を両親に話すことが出来ずに悩んでいた。その理由は、一度目の落第の時に父親が錯乱し、家族の前で凄まじい「狂態」を見せたからである。しかし、啓一が落第した原因は、啓一の「怠惰な生活」にあった。その事を語り手は次のように指摘する。

彼は茫然と白痴のやうにあたりの春を体で感じながら

坐つてゐた。すると、不意に何ともいひやうのない苛  
立たしい観念の切つ端が頭に浮んできて、彼は弾かれ  
たものゝやうに飛上ると、あたりの手頃な石を両手で  
抱へて、力まかせにそれを投出した。投げられた石は  
他の石と衝突して、彼の足元で火を発して壊けた。そ  
の時、彼は彼に苛酷なもの——意地の悪い教師や、ノ  
ートを借して呉れない秀才や、彼の後を執拗く学校ま  
でつけてくる借金取などの顔が、粉微塵にその石の下  
に壊けてしまつてゐれば！ とそんな空想で益々昂奮  
して、何度も同じやうなことを繰返した。不思議なこ  
とではあるが、彼はその時自身の京都での生活に就い  
ては、殆んど何等の反省をも起さなかつた。落第とい  
ふ事実の前には全く途方を失ふ程に苦しんでゐながら、  
その原因である彼の怠惰な生活に就いては、少しも深  
く後悔をしてゐなかつた。彼は百日以上も学校を欠席  
した上に、昼間は猫のやうにうつらうつらと眠つてゐ  
て、夜になるときまつて京都の街々をうろつきまはつ  
た。制服や教科書まで質にいれて、その金で球を撞い  
たり女を買ふのだつた。下宿の近所の食堂やカフェー  
等にはまたたくうちに借金がかさんで、その度に彼は  
それを逃れるために転々と下宿を移つた。そして試験  
が近づくと頃になると、彼は狼狽してクラスの連中の間

をノートを借りて駆けまはつた。

引用が長くなつたが、ここには啓一の不良少年じみた  
「怠惰な生活」だけではなく、自分勝手に無反省で、後に  
小説でも語られるが、父親同様に「堪性のない性格」が良  
く表現されている。作家論的興味に照らし合わせてみれば、  
ここに梶井基次郎との交遊を想起することも可能ではある  
が、ここではそのことは問わない。むしろここでは、小説  
に表現される啓一の不良性について、次に引用する記述に  
照らし合わせてみたい。

彼等（不良少年）の十中八九は自瀆の悪癖を有すると  
共に、僅か十四五歳の少年で既に遊里に足を踏み入れ、  
売笑婦の群に投じ、或は常に猥褻の言語を弄するを樂  
みとしてゐるものもある（一）内は論者。（中略）  
その憤怒の因由を正して観ると、感情及び情緒より昂  
進するもの多く、例へば嫉妬、猜疑、怨恨、嫌忌、反  
情、不快等が相錯綜して起つたものである。而して彼  
等は一度自暴的に出でんか。あらゆる方策を以てして  
も容易に冷静に立ち帰へらしめ得ないほど、強烈な興  
奮性と感激性との持主である。（中略）淫蕩的な彼  
等の生活は、カフェーを中心として、其処に出入する  
不良分子に近い人間を脅し、且不良の女給を手玉にし  
ては凡ゆるる犯罪を醸成する。

ここに引用したのは、「不良少年」の実状について「満十四歳以上二十一歳迄の男子に限定し」、「内的観察を下し、その不良化の経路を尋ね」ながら彼等の「不良」性について研究を行った河野通雄の研究報告書『不良少年の実際』（育成館、一九二八年四月）の一部を抜き出したものである。この記述と啓一の「怠惰な生活」の描写とを比較・検証してみれば、「不良少年」の特性は、そのまま「春」の主人公・啓一の「怠惰な生活」の特性と重なり合うことが分かる。つまり、「春」の主人公・啓一は、同時代に見られる典型的な「不良少年」の特性を併せ持った「少年」として登場させられていたのだ。ここには「事実を越えた純粹な思ひ出」として「春」を小説化していく中谷のストーリーテラーとしての手腕が活かされているとみるべきだろう。

この後、啓一は「遁走」を計画し、「父の小篋子から拔出して置いた百円あまりの金を懐にいれて」「書置き」を残して家を出て、「軽便の駅の方へ」と向かう。そこで、前述の川端が引用した妹と遭遇する場面となり、啓一は「近江」の田舎町から「京都」へと旅立つのである。そんな啓一が京都に到着した瞬間の心境は、次のようなものであった。

その夕方、彼の汽車が京都に着くと、彼はあたりの

明るい灯の色に、急に心が明るく膨らんでくるのをおぼえた。今まで、暮れてゆく近江平野の暗い汽車の窓で、故郷のことなどを思ったり、希望のない自分の前途を考へてすつかり塩垂れてゐた彼は、一朝にしてその感慨を失つてゆくやうな自分に気づいて少なからず狼狽した。

ここにも、先に述べた啓一の不真面目な性格が表現されているが、注目したいのは「故郷」から「京都」という場／空間トポスペースの移動に伴って、そこで用いられる表現が「暗い／明るい」という形容詞で区分けされることだ。もちろん、それは「暮れてゆく近江平野」と京都駅の「明るい灯の色」という、空間上での〈明暗〉の変化を示唆していることに間違いはない。「故郷」から移動する汽車のなかで啓一は「暮れてゆく近江平野の暗い汽車の窓」を見つめながら、「希望のない自分の前途を考へてすつかり塩垂れ」てしまっている。だが、「汽車が京都に着くと、彼はあたりの明るい灯の色に、急に心が明るく膨らんでくる」のだ。

しかし、この空間上での明るさの変化に伴い、啓一の心境が変化していく様子は見逃せない。この空間の移動／心境の変化で考えてみたいのが、O・F・ボルノウの「空間」の捉え方である。ボルノウは「三つの次元でメートルとかセンチメートルをつかつて測ることのできる数学的空

間」の「決定的な性質」である「等質性」に対し、「空間にたいする人間の関係」について考えを巡らしていく際には「体験されている空間」という概念を導入する必要性があるのだと説いている。次の引用は、そんなボルノウの「体験されている空間」の考え方をまとめたものだ。

この空間が、そのなかで生活している人間と相互関係にあるものとして人間にどのくらい強くむすびついているかは、この空間が異なる人間にたいして異なる空間であるということだけではなく、個人にとつても、その人のその時その時の構えや気分の状態によつて変化するということからおしはかることができる。人間の「なかの」変化はいずれも、その人間のへ生きられている空間」の変化を条件づける。

ボルノウの指摘する空間論は、「故郷」から「京都」の移動に伴う啓一の心境の変化を的確に捉えた発言として重視すべきだろう。啓一は「暮れてゆく近江平野の暗い汽車の窓」を見ることによつて「希望のない自分の前途を考へてすつかり塩垂れ」てしまう。そこには「暮れてゆく」景色／空間の暗さの他に、「故郷」の自然と繋がる「近江平野」の光景によつて父親の恐ろしい「錯乱振り」が喚起されるという、心境の「暗さ」があったからではなかったか。その恐怖感、この後に出逢う久慈との対話の際にも

誘発される。

啓一は久慈の落ち着いた話振りと、彼の父に対する呑気さうな考方から、世の常の父子関係と言ふものを感じてそれがひどく羨しかつた。彼の父の堪性のない性格と、それをそのまま受継いだ彼との関係は、久慈の場合のやうにどうしてもうまく行かなかつた。この前の落第の時の父の錯乱振りから考へても今度ほどんなことが持上るか、啓一はその怖ろしさに堪へることが出来なかつた。彼は彼の書置きを見た父母の様子を想像し、今頃田舎の家で一家がどんなに逆上した混乱のなかにあるだらうかと思ふと、遽かに堪へ難い憂鬱に襲はれて、思はず激しく身震ひをした。

このような「父の錯乱振り」に「思はず激しく身震ひ」する啓一の心情に関しては、完全には同情することができないものであるにしても、思いやるころはあるだろう。しかし、ここで興味深いのは、汽車に乗っている間の啓一の沈み込んだ気分が、「故郷」の自然と切り離された「京都」の都会の「明るい灯」を眺めることによつて、一気に「明るく膨ら」みだすことだ。そして、その気分の高揚は、時間の経過とともに大胆な行動を啓一にとらせるようになる。

京都駅前前の広場に立つて、ぼーと明るく輝いてゐる四

条あたりの空の色に見いつた時、彼は激しい動揺を胸に感じた。真直ぐ吉田町の下宿へ帰らうと言ふ真面目な考へと、四条から祇園へかけて夜の世界へ流れこみたいといふ誘惑とが彼の内で格闘を始めた。彼はその二つの考へに自分ではいづれとも勝敗を決定しようとは思はなかつた。そして、たゞ漠然と其処へ来合せた祇園行の電車に飛乗つてしまつた。

啓一の眼前に拡がる光景は「等質性」に基づき、建物や道路の距離や配置を数値に置き換えた「数学的空間」ではない。そこには「激しい動揺を胸に感じ」るほど心が躍動する「へ生きられている空間」としての「京都」が拓けていたのである。そして、もう一つ付け加えるならば、そこには、これから何かが起こるかも知れないという期待が込められた、啓一にとつての「期待の場」<sup>トポス</sup>が拡がっていたと言ふことが出来るだろう。<sup>5)</sup>

啓一には下宿先に直行しようという「真面目な考へ」と「夜の世界へ流れこみたいといふ誘惑」の「二つの考へ」と「格闘」する状況に陥るが、その後に来る「祇園行の電車に飛乗つ」たところから見ても、最初から「真面目な考へ」の割合の方が少ないことは容易に想像できる。根っからの「不良少年」としての特性を身につけた啓一にとつて、「夜の世界へ流れこみたいといふ誘惑」は、越えることが

出来ない大きな壁として存在していたはずだ。それは「二つの考へ」と「格闘」する啓一の決定を下す判断材料にも良く現れている。

電灯の少い烏丸の通りを上つてゆく電車の中でも、彼はまだ決定的な予定は持つてゐなかつた。かうしてゆけば、多分祇園で下車することになるだらうとだけ考へてゐたが、真直ぐ下宿へ帰りたければ其処で東山線に乗換へて熊野神社の方へゆけばよいのだつた。それは其の時の決定を待てばよいので、それまでは自分を電車に任して置くより仕方がなかつた。けれども、四条が近づくに従つて、街の灯の色は次第に明るさを増して来た。彼の心も知らぬ間にその影響を受けて、何か傍若無人なものがそろそろと体の中を動き始めてきた。四条烏丸で電車が祇園の方へ方向を換へた時、急に花見客らしい連中が「ぱい乗込んできた。その時、初めて自分の心に一つの中心を発見した。花見だ！今夜だけはゆつくりと花を見てやらう。」

啓一の「心」は「花見客らしい連中が「ぱい乗込んで」くることによつて決定される。それは「花見」に行くことだ。祇園に到着した啓一は「公園への石段を雑踏する人々に押されながら」「群集」の入り混じる花見会場に向かう。公園の中は人でいっぱいだつた。(中略)それは、

群集といふものゝ平均された感情にとけ込んでいつた  
とでも言ふのか、彼はたゞその雑踏の中に押合つてゐ  
るだけで愉快だった。(中略) 人々は誰も花などを眺  
めやうとはしてゐなかつた。たゞ体と体とを押し合ひな  
がら、それだけですつかり満足して上機嫌に浮かれて  
ゐた。かうした酔つぱらつた群集の光景は、彼の心を  
いやが上にも弾ませた。

「故郷」から「遁走」してきたという現実的な問題は、こ  
こで捨象される。そんな啓一の眼前に現れるのが「落第坊  
主」の「久慈」である。

#### 四、ヘドツペルゲンガー・久慈

啓一と久慈の関係は、花見会場で邂逅するところから始  
まる。

やがて体の疲労を感じて休息のためにベンチを物色し  
た。(中略) そして、薄暗い木影になつた所に、たゞ  
一人で伸々と一つのベンチを占領して横になつてゐる  
男のあるを見て、彼はその方へ歩み寄つた。

「済みません。暫く休ませて下さい」

さう言つて彼がそのベンチの前に立停ると、今まで  
横になつてゐた紺飛白の男はむつくりと起きあがつた。  
そして啓一の顔を見るといきなり(やあ!)と感嘆の

声を上げた。同時に彼も(おお!)と言つて相手の変  
つた風貌をみつめた。(どうした、その頭は?) 暫く  
して彼が相手の珍らしい坊主頭を指してそんな風に訊  
ねると、相手は笑ひながら(発心したよ!)といつて  
その坊主頭を片手で撫であげた。咄嗟に彼は凡ての事  
情を了解した。そして、いきなり(落第坊主!)と浴  
せかけた。相手はアハハハと朗らかに笑つた。彼等は  
並んでそのベンチに腰を降した。相手の男は啓一とは  
クラスは異つたが、同じ年に入学して暫く寮で同じ室  
にゐたことのある久慈と言ふ男だつた。久慈も彼と同  
じやうにこれで二度目の落第だつた。

この後、久慈と啓一は「四条通りのあるカフェー」で一  
緒に酒を飲むことになるのだが、留意したいのは、二人が  
「同じ年に入学」し、「同じやうにこれで二度目の落第」  
をしていることだ。これは偶然の一致なのだろうか。その  
点を見ていくため、この後の二人の行動を追いかけてみよ  
う。

啓一は「呂律」が「怪しくな」り、やたらと「酒を強  
要」するようになった久慈に対し、我慢が出来なくなつて  
帰ろうと席を立つ。その時、久慈がとつた行動は、

「う、帰る? 帰つて見ろ、俺をすつぽかして帰れる  
なら帰つて見ろ! そんなことをすれば、貴様の頭に

ビール瓶を叩きつけてやるばかりだから」

久慈は矢庭に一本のビール瓶を擲んで立上つた。すると、今まで彼等が何も話しかけようとしないので、退屈して傍の椅子に坐つてゐた女給が、狼狽して久慈の前に手をひろげた。久慈は何と思つたか、急におとなしく熊のやうにうなづきながら再び腰を降した。そして（ビール！　ビールを持つて来い！）と激しく叫びながら、同時に啓一に対してはしきりに謝罪するやうな格好で（たのむ！　たのむ！）と繰返して、あくまで彼を其場にとめて置かうと努めるのだつた。

というやうなものであつた。啓一は久慈によつて引き留められるが、啓一の方でも「離れ難い気持」が起こり、「そのまゝ愚図々と卓に帰つ」て結局、その後二人は「飲みくらべ」を行うことになる。

その後、二人は「傍若無人な振舞ひを続け」ながら「そのカフエーを出」て、久慈の「俺に童貞を捨てさせろ」と言う「全く思ひもかけない」告白から「女達のある街」に向かう。だが、翌日の夕方に啓一の部屋に現れた久慈は、啓一が女郎屋に久慈を連れて行つた事を「批難」する。自分から「童貞を捨てさせろ」と喚き散らしていた久慈の豹変ぶりに全く納得がいかない啓一は、しばらくの間は久慈と激しく議論するが、やがては二人とも疲れ切つて眠つて

しまふ。しかし、ここで興味深いのは、そんな二人がこれから起こす行動である。

それからの幾日間、啓一と久慈とは毎日行動を共にした。朝、午後二時頃になつて彼等は眼をさました。お互にむつつりと口も利かないで、彼等は顔を洗ひそれから飯を食ふために食堂へ出かけて行つた。飯を食ふ間も二人は互に向ひあつたきり、全然他人同士のやうに無関心な顔を突合してゐた。けれども、心のなかでは二人はお互を憎み合つてゐた。その証拠に、彼等は若し何かのきつかけで、どちらかゞ物を言ひかけると、相手の方は必ず鋭い眼つきでそれに答へるのが普通だつた。すると、その眼の色がまた話かけた方を怒らし、感情はそれからそれへとからみ合つて行つた。二人はそんな風に憎み合ひながら、どちらもつくづく独りになりたいと思つてゐた。然もどちらかゞ「左様なら」とでも言ひだすと、きまつてその相手は彼をひきとめようとあらゆる言葉を使つた。それは、いはゞ痴情にもつれ合つた男女の関係にも似たものであつたが同時にこの二人の落第生は何よりも孤独を怖れてゐるのだつた。

二人は何故か共に行動するようになる。その様子は、まるで鏡に映し出された自分自身を眺めているようでもある。

そして、そんな二人の行動はさらにエスカレートしていく。彼等は飯を食つてしまふと、きまつて街へ出て行つた。熊野神社から丸太町通りを古本屋を覗きながら寺町へ出て、それから寺町二条のかぎやと言ふ喫茶店へ寄つて、その椅子に腰を降して不味さうに二三杯のお茶を飲むのだつた。そのうちにそろそろ街には灯がついて、今まで白けた姿を曝してゐた街が次第に活気を見せてくる。彼等の心もその灯の色に染められると、少しづつ色めいてきて、やがて二人はその中へ降りていつた。それから京極の人混みに洗はれて四条へ出る頃には、彼等はお互にすつかり違つた人間になつてゐた。ここで「寺町二条のかぎやと言ふ喫茶店」に言及していることは、前述した中谷と梶井基次郎との交遊という、作家論的興味を惹きつける言説<sup>6</sup>ではあるが、そこはあえて問わない。注目したいのは、前述のボルノウが指摘する「生きられてゐる空間」の変化<sup>7</sup>が二人の眼差しに見出せるということだ。二人は「京極の人混みに洗はれて四条へ出る頃」になると、何故か「すつかり違つた人間」に変化する。そして、次のような行動を起こす。

彼等は急に冗舌になり八尾政とか菊水とか、酒と女のゐる店へ這入つて、(中略)彼等は肌になつはりつくやうな粘々した女の声に溢れた街を、ひとかど道楽者

の格好で、ぶらぶらと芸者の後などについて歩きまはつた。そして、どこと言ふ決つた家といふことはなく、その時その時の気まぐれで出鱈目に何処か一軒の茶屋にあがるのだつた。

その後、「その街から出て来る頃には」「お互にてれくささうに顔をそ向けあつて並んで歩」き、そのまま二人は「一緒にどちらかの下宿へ引あげ」るのだ<sup>8</sup>。

以上のような啓一と久慈の行動の共通性は、どうも偶然の関係ではなさそうである。二人はあまりに同じ行動をとりにすぎている。まるで、久慈という男は啓一の姿を投影した「亡霊」のような存在として登場させられているようだ。もう少し言い方を変えてみれば、啓一の影のように忍び寄る「ドッペルゲンガー」的な存在のようである。

仮に久慈が啓一の「ドッペルゲンガー」であるとすると、のなら、それは明らかに、啓一に何かを伝えるためのメッセージの役割を果たしているはずだ。それは一体何だったのだろうか。

##### 五、「」どうにもならぬ真実の姿

二人の奇妙な共同生活は、突然終止符を打たれる。そこから前節で提起された問題について考えてみよう。

だが、遂に彼等がお互に離れる日がつつてきた。ある

夜、やはりカフエーの卓で力いっぱい抱き合つてゐた。彼等は過つて啓一が相手の足を踏んだことから、突然激しい喧嘩をしてみました。彼等の親和はそのまま、撲り合ひに交つてゐた。(中略) 然し、やがて彼等は五人の客たちによつて引離された。二人はお互ににらみ合ひながら起きあがつて、尚もしきりに悪罵を投げかけ、人々のすきをねらつて何度も掴みかゝらうとした。だが、そのうちに啓一は急に心が白けてきた。そして、ぐるりと彼等をとりまいてゐる客達や女給たちの顔を見廻すと、すつかり意気が沈んで彼はまだ猛々しく肩を怒らしてゐる久慈を其の場に残して、矢庭に外の街へ逃出してしまつた。

たうとう啓一は独りに歸つた。その頃はもう学校では新しい学年が始まつてゐて、朝は眼をさますとカーンカーンと授業の鐘の音がきこえて来た。

ここで「心が白け」て「意気が沈んで」いく啓一の心境は、ヘドツペルゲンガー」的な存在である久慈から心が離れていく様子を示唆していると言えるだろう。そして、その後には啓一は、久慈というヘドツペルゲンガー」を意識から振り払うかのように「外の街へ逃出」する。この瞬間、啓一は「独りに歸つた」わけだが、それでも啓一は「夜の街」の魅力を忘れられずにいた。

昼間は何の光も自分の明日に想像出来ないまで絶望してゐる彼に、夜は思ひがけない一つの意志を持つてくるとのだった。何か心を躍らせる喜びが街には彼を待つてゐるやうに思はれるのだった。

まるで麻薬のように、「夜の街」の魅力に支配される啓一。結局のところ、啓一は墮落した自分を映しだした久慈というヘドツペルゲンガー」から「逃出」しても、自己の存在を投影できるもの／場<sup>ホム</sup>としては「夜の街」しかなかつたようである。「夜」だけが、自分のために「一つの意志を持つて」きてくれると考える啓一。そして、恐らくはこれが川端が「春」に見出した「どうにもならぬ真実の姿」だったのではないだろうか。「怠惰な生活」を送る「落第生」が、自分自身の存在意義をぎりぎりの状況で見極めようとする時、その視線の先に捉えられたのは、非現実的な輝きを放ち続ける「夜の街」だった。川端はそんな啓一やヘドツペルゲンガー」的存在の久慈の姿を読み解きながら、そこに「どうにもならぬ真実の姿」を見たのであろう。身につけてしまった「怠惰な習慣」はなかなか振り払うことはできない。それは人間の本質なのであろう。だからこそ、川端は「どうにもならぬ真実の姿」と指摘したのではないだろうか。つまり、久慈とは啓一が抱える「怠惰な習慣」を映し出した存在だったのである。

だが、テキストはそんな啓一に、最後に救いの手を差し伸べようとするところで閉じられる。それは、啓一が最も畏怖してきた「父」からの手紙による啓一への「希望」である。

そのうちに、彼の手は自ら机の曳出しをあげてゐた。彼は静かにその奥に手を突込んで、ずつと以前に受取つた父の手紙を取出した。封を切つて巻紙に書いたその手紙を展べると、最初の一行から父の激しい昂奮が彼にいどみかゝつて来た。躍つたやうな大きい文字で、父はのつけから彼を馬鹿者だと罵つてゐた。それから、親の顔に泥を塗るやうな仕打ちだといつて、彼の遁走のことを批難した。

父親からの手紙はこのよゝうな彼の「批難」から始まるが、何故か啓一は「一々忠実な態度で答へながら、ゆつくりと読」み進めていく。そんな啓一の眼に飛び込んできたのは「啓一への批難と同時に父自身の悔恨が書きこまれてゐた」箇所である。そして、再度「激しい怒り」の文面になりながら、次のよゝうな結末に向かう。

然し最後になると、啓一の将来に対する顧慮から、若し彼にその意志があるなら、も一度学校をやり直してみるようにと附加へ、更に繰返して退学には絶対賛成出来ないとい書いてあつた。啓一はさうした文面から、

深く彼自身の責任を感じて、父の老年の弱々しい反省と、今になつてもなほ啓一に希望を失はない父の心情に切ない程の感動を圧へることが出来なかつた。

小説「春」はここで閉じられる。この後、啓一がどのよゝうな行動を起こしたのかは分からない。改心したのか相変わらずへ怠惰な習慣を積み重ねているのか……。それは、このテキストを読む者がそれぞれの立場で判断を行つたら良いと思われる。啓一の悩みや人生に対する問いかけに寄り添つたり反発したりすることができたなら、その度に、このテキストは我々に対して、様々な「読み」を提供してくれるだろう。

#### 注

(1) 詳しい説明を「解題」(『川端康成全集』第三〇巻、新潮社、一九八二年六月)から引用する。

「著者(川端康成)は、大正十一年の二十三歳から昭和十六年の四十二歳まで、二十年間にわたつて、文芸時評の筆を執つてきた(一)内は論者。そして、数々の新しい才能を見出しては、これを励し、新人として世に送つた。中には、中途にして志を失ふ者もあつて、今日には伝はらない者も、いくばくかはあらうけれども、とにかく著者は、実作家としては、当代第一の批評家であつた。それは、歿する数年前まで、多忙な創作活動と煩瑣な社会生活のかたはら、芥川賞の選者をつとめ、常に新人の作品に、無私で接してゐたのを見ても

よく解ることであり、これには、われわれ関係者は、頭のかがる思ひを幾度もしたことである」

(2) 川端康成「六号雑記 新人の強さ」(「文学界」一九三四年八月)

(3) 中谷孝雄「梶井基次郎——京都時代」(「知性」一九四〇年一月。なお引用に関しては「梶井基次郎全集」別巻、筑摩書房、二〇〇〇年九月による)に「梶井と連れだつて「球撞き」に行った思い出が語られている。

(4) O・F・ボルノウ／大塚恵一・池川健司・中村浩平訳『人間と空間』(せりか書房、一九八八年四月)

(5) 拙稿「へ観光」・へ自殺」・へ恋愛」——中谷孝雄「春の絵巻」に表象された〈京都〉——(「佛敎大学総合研究所紀要別冊 京都における日本近代文学の生成と展開」二〇〇八年一二月)で用いた概念。中谷が一九三四年四月に文芸雑誌「行動」に発表した「春の絵巻」では、石田・丹羽・保科という三人の学生が「嵐山」に「花見」に出かけるが、彼等は純粹に花が見たくて「花見」に行くのではなく、何か「強い手応へを求め」て「期待の瞳を輝かし」て出かけるのだ。つまり、彼等にとつては〈嵐山〉とは、通常の「花見」を行う場所ではなく、もつと別な「期待」を抱かせるトポスとして形成されていたのである。そのような特別なトポスとして形成される空間／場所を、拙稿では「期待の場」という呼び方をした。実は、「春の絵巻」で用いられた登場人物に特別な「期待」を抱かせる〈期待の場〉の設定は、この「春」で用いた設定が下敷きになっており、さらには、論者は中谷の学生の青春を題材にした小説の全ての要素がこの「春」を一つの基点にしていると考えているが、詳細については、別稿

で考えてみたい。

(6) 中谷孝雄「檸檬」の思ひ出」(「世紀」一九三四年六月。なお引用に関しては「梶井基次郎全集」別巻、筑摩書房、二〇〇〇年九月による)に次のような記述がある。

「その頃、僕たちは殆んど毎日のやうに連れだつてゐたので、何時もゆく鑑屋の給仕女たちからは「邯鄲の兄弟」など、呼ばれてゐた。邯鄲といふのは鑑屋にある菓子の名で、坊主枕のやうな形をした、大きさは太い拇指位の餅菓子である」

(7) このやうな啓一と久慈の行動を見ていくと、前述の「明暗」の変化を昼／夜という対比構造で考えることができるだろう。興味深いのは、自然の光の明るさでは気分の高揚が見られず、夕方近くになり、街に人工的な灯がともり始める頃に気分の高揚が見られることである。

〔付記〕「春」本文の引用は、『中谷孝雄全集 第一巻』(新学社、一九九七年五月)による。また、引用に際しては、適宜旧字を新字に改めた。